

第33回目 新しい人を身に着る (5)

はじめに

●「古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に着る」(4章 22, 24 節)ということについて、今回はその第五回目です。「新しい人」とは、「神にかたどって造り出された、新しい人のこと」です。つまり、神の子どもとされたクリスチャンのことです。「新しい人を着る」とは、別のことばで分かりやすく言うならば、

(1) 「キリストのように」生きること Just like Christ / Just like Jesus

(2) 「キリストの心」を心とすること

① キリストが神(御父)を信頼したように、神を信頼すること。—それは心に平安をもたらします。

② キリストが神(御父)を愛し、人を愛されたように、愛のうちを歩むこと。

これは、いわば総論的なものです。今回は「キリストのように生きること」「キリストの心を心として生きること」の各論の第二として、私たちの感情、とりわけ、怒りの感情について取り上げました。

●今回は各論の第三です。神の聖霊は、キリストを信じるすべての者に、例外なく与えられる神様のプレゼントですが、使徒パウロは4章 30 節で以下のように記しています。

神の聖霊を悲しませてはなりません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。

1. 神の子どもとされた保証としての聖霊

●テキストの4章 30 節の中のいくつかの言葉を、まず説明しておきたいと思います。

①「**あなたがた**」とは、キリストを自分の救い主として信じ受け入れた者たちのことです。

②「**贖いの日のために**」とはどういうことでしょうか。—ここではとりあえず、「日」を取って、「贖いのために」として考えてみると分かりやすいと思います。本来、「贖い」とは、ある人が失ってしまった権利や財産をだれかが身代わりとなって買い戻すことを意味します。本来、私たちは神の子どもとして造られましたが、サタンの誘惑によってサタンの言うことを信じたために、神の子どもとしてのあらゆる権利と祝福を失ってしまいました。そんな私たちのために、神様自らが、代価を払って私たちを神の子どもとして再び買い戻し、神の子どもとしての権利と祝福を回復してくださいました。聖霊はそのことの保証です。ここで、先ほど抜いた「日」ということばを正式に入れて考えてみると、「贖いの日のために」とは、キリストの再臨により、天の御国が地において実現する日です。それはやがて、将来、必ず実現します。そのとき、私たちはキリストにあって神の子どもとしての完全な資産を、神からの相続財産を受け継ぐことができるのです。その日が「贖いの日」です。今、現在、私たちはキリストにあって贖われて神の子どもとされているのですが、「贖いの日」には完全な形で御国を受け継ぎ、神の子としての完全な回復がなされるのです。その回復とは神ご自身との愛に満ちたいのちの交わりです。

③「**証印を押されている**」の「証印」とは、あることを証明するための印です。同意書に印鑑を押すとか、契約

אגרת שאול אל האפסים

書に同意することを証明するために私たちは印鑑を押します。それが法的により効力をもたせる場合には、三文判ではなく実印を用います。欧米ではサインで済むのですが、日本の場合にはなぜか印鑑です。「聖霊による証印」とは、あなたがキリストを信じることによって、神があなたを神の子どもとして正式に買い戻して下さいましたよということを証明する実印なのです。聖霊がキリストを信じる者に例外なく与えられているのは、その者が神の子どもとされたからです。この聖霊が与えられていることこそ、神の実印が押されている証拠なのです。

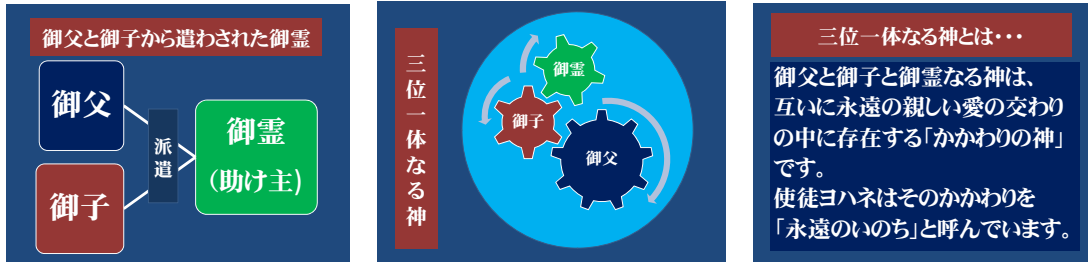
●聖霊は私たちが神の子どもとして生きるために神から遣わされた大切な「助け主」なのです。ですから、使徒パウロは、「神の聖霊—聖霊、主の御霊、御霊とも言う—を悲しませてはなりません。」と言っているのです。イエス・キリストはこの御霊を「助け主」と言われました。なんの「助け」なのかと言いますと、私たちが神の子どもとして生きるために必要な助けですが、その助けには、さまざまな面があります。たとえば、私たちが神の子であるという確信を与える助けであったり、私たちの祈りを神のみこころにかなうかたちでとりなしてくれる助けであったり、神のことばを理解する助けであったり、神との愛のかかわりや神の家族との愛のかかわりを妨げている問題に光を当て、解決へと導く助けであったりします。いずれにしても、私たちになくてはならない「助け主」こそ、聖霊(御霊)なる神なのです。この神がキリストを信じるすべての心に与えられていることをまず、しっかりと信じましょう。

2. 神の子どもの保証として与えられた聖霊が悲しまれるとは・・・

●私たちが神の子どもとされた、その保証として与えられた聖霊が悲しまれるとはどういうことでしょうか。どうすると聖霊を悲しませることになるのでしょうか。エペソ書 4 章 30 節の前後には、「神の聖霊が悲しまれる」罪が挙げられています。

古い人を脱ぐ	新しい人を着る
(1) 偽りを捨てる	(1) 真実を語る
(2) 憤ったままでいてはいけない	(2) 赦しなさい
(3) 悪い言葉を一切口から出さない	(3) 人の徳を養うのに役立つことばを語れ
(4) 盗んではならない	(4) 働いて与えなさい(施しができるほどに)
(5) 無慈悲、憤り、叫びを一切捨てよ	(5) 親切的な、心の優しい人になりなさい

●ここにあげられている「古い人」が「新しい人」を着るその内容は、すべてかかわりに関するものです。人と人とのかかわり、特に、主にある兄弟姉妹たちのかかわりに関するものばかりです。聖霊は、私たちが古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着ることを助けて下さる「助け主」(助ける神)として遣わされました。



●御父と御子から遣わされた聖霊、この問題をめぐって大論争が起こった時代があります。聖霊は御父からか、それとも御子からなのかという問題、聖書にはいずれからも遣わされるとあります。本質的に交わりの神ですから、御父からでも御子からでもあるというのがヨハネの言おうとしているところです。三位一体の神とは、「御父と御子と御霊なる神のことであり、それぞれ位格(ペルソナ)を持ちながら、一体であるという存在。互いに永遠の愛の交わりの中に存在する「かかわりの神」です。ヨハネはこの永遠の愛のかかわりを「永遠のいのち」と呼びました。

●御父から御子から遣わされた聖霊が悲しまれるとするならば、それはかかわりの悲しみです。古い人が着ている「偽り(不正直)、怒り(憤り)、悪い言葉(愚かな、聞くに堪えない、ふざけたことば、人の存在や心を傷つけることば)、盗み、悪意をもった無慈悲や憤り、叫び、そしり」は、キリストのからだという有機的なかかわりを破壊するものです。もし私たちがそうした罪に気づかなかったとしたら、聖霊が悲しまれるのです。なぜなら、愛のかかわりをもたらすために私たちに遣わされた方だからです。

●この方が悲しまれるところに、キリストのからだを建て上げることは不可能です。教会間における対立、主にある兄弟姉妹における対立・・・は、すべて聖霊の悲しまれるところです。使徒パウロがエペソ人への手紙を書いたのは、キリストのからだである教会を建て上げさせるためです。人と人との間に存在するすべての「隔ての壁」を打ち壊して平和を実現し、キリストにあってすべてが「一つになる」という神の夢を実現するためです。ところが、私たちの心にはしばしば神の聖霊を悲しませている現実があるのではないのでしょうか。このことに対して、パウロは「神の聖霊を悲しませてはいけません」としていますが、一体どのようにすればよいのでしょうか。

3. 助言者なる聖霊は、しばしば、「夜」、あなたに語りかける

●「助け主」である聖霊様は私たちに対して、強引であったり、強制したり、横暴な方では決してありません。むしろ、紳士のような方です。私たちを助ける上において、決して、強制する方ではありません。追い立てる方でもありません。私たちの意思を重んじ、私たちの主体性に働きかけ、私たちが自らの意思で自発的に考え行動し得るように、静かに助言してくれる方なのです。ですから、その方の声を聞くためには**静けさ**が必要です。

●詩篇 16 篇の作者は次のように告白しています。

神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。私は主に申し上げました。

『あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。』(1～2 節)

אגרת שאול אל האפסים

● 実にすばらしい信仰の告白ではありませんか。しかしダビデがこうした告白に導かれるまでには、多くの苦しみや心の戦いを余儀なくされたのです。その告白に行きつくまでに、彼は何度も何度も「夜」を通ったのです。7節を見てみましょう。

16:7 私は助言を下された主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。

● 7節で「私は助言を下された主をほめたたえる」と告白していますが、この「助言を下された主」こそ、新約聖書でいう「助け主」なる聖霊だと考えます。新約の時代においては、イエス・キリストを信じる者はみな例外なく聖霊が与えられますが、旧約聖書では、そういうことは特定の人にしかありませんでした。ダビデはその特定の部類に入っている人でした。ダビデは「助言を下された主」を静かに賛美しているのです。原語の「バーラフ」とは声を出さずに神を賛美するのが特徴です。静かな、沈黙の賛美です。心の中の賛美です。

● さてどんな内容について賛美しているのでしょうか。それは「夜になると、私の心が私に教える」ということについてです。「私の心が私に教える」－これは実に不思議な表現です。「助言をくださる主」と「私の心が私に教える」とはどういう関係があるのでしょうか。それは、主の「助言」とは、人の心に静かに働きかけて、教え諭すということです。しかも「夜」です。「夜」とはどんなときでしょうか。それは、孤独な時、一人になる時、最も静かな時と言えます。日毎に訪れる「夜」もあれば、人生における特別な「夜」もあります。それは八方塞がり、行き詰まりの時であり、自分で自分をどうしたらよいか分からないときです。使徒パウロの人生にも三つの特別な「夜」があったことを、ルカは「使徒の働き」の中で記しています。

①16章9節

「ある夜、パウロは幻を見た。」

その夜の背景には、第一伝道旅行での同労者であったバルナバとの激しい反目の後に、別行動をとることになって、新しいスタッフ(シラス、テモテ)とともに新しい伝道旅行に出た時に、行くところ行くところ、みなうまくいかなかったのです。聖書は「聖霊によって禁じられた」と記しています。八方塞がりに陥ったパウロが「ある夜」静かに祈っていた時に、幻を見ました。ひとりの人が彼の前に立って、「マケドニアに渡って来て、私たちを助けて下さい」と懇願している姿でした。パウロはこの幻を見たとき、ただちにマケドニアに渡って行きました。神がそこに招いておられることを「確信」したからです。この確信への導きの中に御霊の「助言」があったと信じます。

②18章9節

「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はいない、この町には、わたしの民がたくさんいるから。』』と言われた。そこで、パウロは一年半、腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」

この背景には、コリントの町におけるユダヤ人による妨害がありました。

③23章11節

「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかしし

たように、ローマでもあかしをしなければならない』と言われた。」

この背景には、エルサレムでパウロが捕えられ議会で尋問を受け、論争が頂点に達したという出来事がありました。

●①②③の「夜」はパウロの人生の節目となっています。新たな始まりとなっているのです。ユダヤでは一日のリズムは「朝から夕」ではなく、「夕があり、朝が来るのです」。「夕」がはじまりなのです。そして「夜」を通して、新しい朝が来るのです。もう一度、詩篇 16 篇の 7 節に戻しましょう。

私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。

●ダビデにとっても「夜」は神の声を聞く大切な時でした。私たちの「夜」において、「私の心が私に教える」、つまり、助言者なる御霊の声を聞くこと、この方の助言に耳を静かに傾けることがなければ、そのあとのダビデのことばはありません。その後のことばとは、8 節、9 節です。

16:8 私はいつも、私の前に主を置いた。(—新共同訳「わたしは絶えず主に相対しています。」)

主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

16:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。

私の身もまた安らかに住まおう。

●ダビデはいつも、自分の前に主を置いたのです。ダビデは御霊の小さな声に従ったとき、どうなったでしょうか。「主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。」と告白したのです。

●私たちの夜に、しばしば聖霊なる助言者は静かに私たちの心に語りかけます。その声は決して強制的な、威圧的な声ではありません。静かな、ささやくような声です。私たちの心の良心に語りかけます。旧約聖書においても、特定の人々に神は聖霊の助けを与えたようです。ダビデはその一人です。「私の心が私に教える」つまり、聖霊による助言を与えられたということです。

●私たちも、一人になって、自分のうちに神の聖霊の悲しみを感じ、自分のあやまちをひとりひとりが気づかされていくことが大切です。聖霊は私の心に助言を与えます。その助言を神からのものとして受け止めていけば、私たちは新しい人を着続けることができ、キリストの体を建て上げていくことができると信じます。ダビデのように、私たち自身がゆるぐことがなく、しかも、心は喜び、たましいは楽しみ、身もまた安らかに住まうことができるのです。あなたはそのことを信じますか。